

大阪関西万博 2025 から考える

大塚朝美

大阪関西万博（EXPO2025）が 2025 年 4 月 13 日に開幕した。工事の遅れや工事中のメタンガス爆発事故、チケット前売りの売れ行き不振など様々な問題が指摘された中でスタートであったが、5 月末の時点では一般の入場者の合計がおよそ 11 万人を超えているという。筆者も万博のチケットが手に入り、急遽万博会場を訪れた。

各国が手掛けるパビリオンの入場予約は全くできず、当日もパビリオンの前には長い行列ができていたため入ることはできなかった。しかし、それぞれのパビリオンにはその国独自のデザインや工夫があり、その外観を見ているだけでも楽しむことができた。大屋根リングから会場を見渡し、カラフルで独創的な建物の数々を眺めながら、やはりパビリオンの大きさが国の経済力と比例しているのだろう、などと考えながら歩いていた。万博への参加国は 158 か国・地域（2025 年 4 月時点）であるが、大型のパビリオンを構えない国々は共有の建物をいくつかのセクションに分けて展示したり、大きなスペースに展示ブースを出す形でそれぞれの国の紹介を行っている。セネガル、バングラデッシュ、アルジェリア、カンボジアなど、国の名前は知っていても、国の産業や特産物など知らないことも多く、展示を見ながらその国の空気を感じつつ、興味深く巡ることができた。展示の説明については、英語の説明のみで示している国、日本語と英語を併記している国、また、日本語でプロモーションビデオを作成している国など、様々であった。英語のみで表示されている展示では、「ここは英語で書かれているから、分からないなあ」という声を耳にした。展示の説明を日本語で表記しなかった理由は、予算の都合だったのか、もしくは日本語表記は必要ないと考えたのかは不明であるが、いずれにしても英語の説明を読まない来場者には情報が伝わらないことについて、主催国はどう考えているのだろうと感じた。一方で、万博という国際的な舞台では英語の使用は常識であり、英語で示して当たり前、という場面に日本の来場者たちはどう対応していくべきであろうかと考えた。文字から得られる情報以外に、様々な展示から視覚的な情報は得られるだろう。異国からきた展示物やそのパビリオンに漂う異国の匂いは、行ったことのない国の雰囲気を感じられ、文字情報から得られる知識とはまた違ったものを感じ取ることができる。しかしながら、英語を教える教員の立場からは、英語を読むことで情報を得ることができれば、さらにその国への理解や興味が深まるのではないだろうかと考えてしまう。

テレビで報道される特集などで目にしていた有名なパビリオンは近くにありながら遠い存在であった。それでも万博会場のシンボルである世界最大の木造建築としてギネス世界記録に認定された大屋根リングから会場を眺めることで、万博という空間を味わうことができた。多くの子供たちが学校から訪れているのを目にしたが、世界の英知が集結した万博の体験から、よりグローバルな視点を持つ地球市民を育てていく責任を考えた万博体験であった。

(おおつか・ともみ 教授)
